老いを生きる白居易

芳村弘道

はじめに

七十五歳の生涯を全うした白居易が、日常、自己を題材にした詩を數多く制作し、彼の內面あるいは風貌を饒舌といってよいほどに克明に詠い續けたことは周知の通りである。こうした日常性や記錄的要素あるいは表現の饒舌さが、白居易の文學の重要な特質となっていることも多くの研究者によって論じられている。また白居易は、長い人生の過程で自らを顧みたその時どきにおいて、時間の流れに身を寄せる一個の人間として、避けることのできない老いというものに目を向け種々の感慨を興し、それを作品化したのであった。

もとより老いは人にとっての重要事であるから、白居易の以前にも以後にも、これを主題とする詩文は枚擧に遑なく制作されている。しかし、彼ほどに繰り返し老いを取り上げた作家は少ないように思われる。白居易の文學と老いに關しても、これまで様々に論及されてきたが[1]、今一度この詩人がいかに老いと向きあって生き拔いたのかを作品に讀みとるならば、高齡社會に入った現代の我々にとって、示唆深いものを見出せるのではなかろうか。

一　衰老意識の現れ

何歳をもって老境に入るのか。これは個人差があって、感じ取り方は各人各様であろうが、現在、國際連合の世界保健機關の定義では六十五歳以上が高齢者とされている。古代の中國に目を轉じると、『禮記』王制や內則に「養老」に關する記事があり、その對象となる年齢は五十歳からである。すなわち「凡そ老を養ふに、有虞氏は燕禮を以てし、夏后氏は饗禮を以てし、殷人は食禮を以てし、周人は脩めて兼ねて之を用ふ。五十は鄉（鄉學）に養ひ、六十は國（國都の小學）に養ひ、七十は學（大學）に養ふ」とあり、以下には高齢者への種々の待遇が記され、「五十は始めて衰ふ」「七十は政を致す（致仕、退職する）」などという一節も見える。『禮記』のこの文は、「老」に關する項目を立てる類書、『藝文類聚』卷十八人部「老」・『太平御覽』卷三百八十三人事部「壽老」に引用されており、五十歳から老年とみなすことがひとつの通念となっていたと分かる。また『白氏六帖事類集』（影印傅增湘舊藏・天理圖書館現藏南宋刊本）の「老」門には、「五十」から「百年」まで十年單位を附載の門目とし、各年齢にまつわる古典の語句（上引『禮記』の文も當然ふくむ）が錄されている。現行の『白氏六帖』が白居易原編のままではないにしろ、この門目も『藝文類聚』等と同樣に經書のもつ強い規範性の下に設定されていたことは疑いない。(3)

さて當の白居易は、『禮記』の五十歳よりも早く、三十歳近くから老いを意識し出している。貞元十六年（八〇〇）二十九歳の作とされる次の「社日關路作」（卷一三・〇六五四）詩にそれが窺われる。(4)

社日關路作　　社日　關路の作

晚景函關路　涼風社日天　　晚景　函關の路　涼風　社日の天
青巖新有雁　紅樹欲無蟬　　青巖　新たに雁有り　紅樹　蟬無からんと欲す

愁立驛樓上　厭行官堠前　　驛樓の上に立つを愁ひ　官堠（一里塚）の前を行くに厭く
蕭條秋興苦　漸近二毛年　　蕭條　秋興の苦しみ　漸く二毛の年に近し

時に白居易は仕官前の不安定な身分で出遊中であった。季節は秋、時刻は夕暮れ。旅愁に加えて深い寂寥感を覺え、思いは衰老にまで及んだ。尾聯「秋興」「二毛」は、有名な晉の潘岳「秋興賦」の「余、春秋三十有二。始めて二毛を見る」を典故とする。尾聯だけではなく一首全體に「秋興賦」の影響が色濃い。主題が「秋興」にあるゆえ、その衰老の意識は實感が乏しく、潘岳の心情に模擬した印象を與える。しかし翌年の「歎髮落」（卷一三・〇六五七）では、「梳に隨ひて落ち去る」頭髮を題材にした具體的な描寫がなされ、現實感を出している。この三十歳の詩に「多病多愁　心　自ら知る。行年未だ老ならざるに髮は先づ衰ふ」と、早衰の原因が明確に自覺されていることは重要である。「多病多愁」は、これから先も長く白居易から去ることはなく、衰老意識を深めてゆく要因となっている。

頭髮の變化は人に老いを感じさせる顯著な兆候であって、白居易も上述の二首を始めとして、白髮や拔け毛、禿頭を數多くの詩に詠い、老いに對する感慨を込めている。[5]「初見白髮」（卷九・〇四〇三）によれば、白髮が生じたのは元和元年（八〇六）三十五歳、盩厔縣尉を拜して間もない頃であった。この詩の白髮は歎老のためにあるのではなく、「青山　方（はじ）めて遠く別れ、黃綬（縣の佐官）初めて從仕す。未だ料らざりき容髮の間、蹉跎たること忽ち此の如きとは」というごとく、三十代半ばにして地方の微官にとどまった不遇感を強調するものであった（それゆえ『白氏文集の批判的研究』や、これに從い元和二年から三年、翰林學士時代の作とする朱金城『白居易年譜』の説を取らず、この詩を元年の作と考えた）。この年秋、同じ畿内の昭應縣の任務も臨時に兼任することとなり、白居易は多忙を極めた。「赤縣　我徒らに勞す」、「官に到ってより　來（このかた）十日、鏡を覽て二毛生ず」と詠う「權攝昭應早秋書事寄元拾遺

兼呈李司祿」（巻九・〇三九四）も役目繁多な地方官暮らしのために白髪が生じたと卑位を歎いている。

元和二年（八〇七）の「曲江早秋」（巻九・〇三九八）は、時の流れをひとしお感ずる初秋の夕暮れ時、長安城東南隅の曲江に足を運んで詠われた詩である。前半八句に秋景と季節の移ろいに悲しみを覺えたことを詠じ、そして

我年三十六　冉冉昏復旦　　我が年　三十六　　冉冉として昏復た旦
人壽七十稀　七十新過半　　人壽　七十は稀にして　　七十　新たに半を過ぐ
且當對酒笑　勿起臨風歎　　且（しばら）く當に酒に對して笑ふべし　　臨風の歎を起こすこと勿かれ

という六句をもって終わっている。末句「臨風歎」は謝莊「月賦」の「風に臨んで歎くこと將（は）た焉んぞ歇まん」に基づき、盡きることのない深い悲嘆をいう。その解消を飲酒に求めて一首を結ぶが、この詩は衰老の悲哀を表わすというよりも、時の流れの早さと人生の短促を歎くことが主題となっていよう。翌年、左拾遺・翰林學士に昇進した白居易は、再び初秋に曲江を訪れて「朱顔自づから銷歇するも、白日窮まり已むこと無し。人壽は山に如かず、年光は水よりも急なり」と「早秋曲江感懷」（巻九・〇四〇六）に詠じた。主題も前年の作と同じくしている。さらに元和四年（八〇九）三十六歳の折り、三たび秋の曲江に臨んで詩を賦した。「曲江感秋」（巻九・〇四一七）がそれで、

昔人三十二　秋興已云悲　　昔人　三十二　　秋興　已に云（こと）に悲し
我今欲四十　秋懷亦可知　　我　今　四十ならんと欲して　　秋懷　亦た知る可し
歲月不虛設　此身隨日衰　　歲月　虛設せず　　此の身　日に隨ひて衰ふ
暗老不自覺　直到鬢成絲　　暗に老ゆること自らは覺らず　　直ちに鬢の絲を成すに到る

と詠い收められている。「昔人」とは、三十二歳で「秋興賦」を作った潘岳を指す。潘岳の年齡を越した白居易は

悲秋の情を切にし、忍び寄る老いの早さを感じ取った。前二作に比べ、用語の上からは「衰」「老」の意識がはっきりと表われているが、時間の推移は變化の實態を伴うという「歳月不虚設」の句が強くはたらいており、この詩も人生短促の思いを詠うことに重きを置いていよう。これら三首の内容は、白詩以前から詠われた主題を出るものでなく、衰老の意識も觀念的で、白居易という生身の人間の老いを傳えようとするとは言い難い。

二　四十歳のころ

白居易が詩題にも示して、老いを正面から詠ったのは元和六年（八一一）四十歳の「歎老」（巻一〇・〇四五三～〇四五五）を最初とする。この作品が三首から成ることから、老いの自覺の深刻さが容易に理解できる。

歎老三首　其一

晨興照清鏡　形影兩寂寞
少年辭我去　白髮隨梳落
萬化成於漸　漸衰看不覺
但恐鏡中顔　今朝老於昨
人年少滿百　不得長歡樂
誰會天地心　千齡與龜鶴
吾聞善醫者　今古稱扁鵲
萬病皆可治　唯無治老藥

老いを歎く三首　其の一

晨に興きて清鏡に照らす　形影　兩(ふたつ)ながら寂寞
少年　我を辭し去り　白髮　梳に隨ひ落つ
萬化は漸に成り　漸く衰ふること看れども覺えず
但だ恐る鏡中の顔　今朝　昨より老いたるを
人年　百に滿つるもの少(まれ)にして　長き歡樂を得ず
誰か會せん天地の心　千齡　龜鶴と與にせんことを
吾聞く　醫を善くする者　今古　扁鵲を稱す
萬病　皆治す可きも　唯だ老いを治す藥無し

既述のごとく抜け毛に老いを感ずることは、これまでにもあった。しかし、この詩の結句「唯無治老藥」に示さ

れた老いの解消を絶望視する深い慨歎は尋常ではない。

當時、白居易は母陳氏の死に遭い、官職を辭して郷里の下邽で服喪の日々を送っていた。さらに一女金鑾が三歳で夭死するという重なる不幸にも見舞われた。同年の作「自覺二首」其二（巻一〇・〇四八三）に「朝に心の愛する所を哭し、暮に心の親しむ所を哭す。……悲しみ來たりて四支は緩び、泣き盡くして雙眸は昏し。所以（かくのゆゑ）に年四十なるに、心は七十の人の如し」と詠じ、母と娘の死を悲しむ餘り、身心がめっきり衰えたという。この詩では悲しみから生じた精神の衰弱を老化に喩えたが、また其一では「四十　未だ老いと爲さざるに、憂傷　早く衰惡す。前歳　二毛生じ、今年　一齒落つ。形骸　日びに損耗し、心事　同じく蕭索たり」と詠い、「憂傷」が肉體の衰えを加速し、心のわびしさを伴って老いを早めるという。「歎老」詩の「老」も肉親の死による「憂傷」がもたらしたものであったと類推してよい。母と娘の不幸によって、白居易は人の限りある生、死の問題を見つめ、そして我が身の老いを顧みた。四十という年齡とこの體驗とが相俟って、彼は老いを切實に受け止めたに違いない。「歎老」其一の慨歎の深刻さはここに發していた。

白居易は、老いを治癒する方法はないと「歎老」其一に悲嘆したが、其三では「壯歳　歡娛せずんば、長年　當に悔悟すべし」と老いの憂いの解消として愉悅を強調している。また同年の「白髮」詩（巻九・〇四二四）においては、「由來　生老死、三病　長（つね）に相隨ふ。無生の念を除却しては、人間に藥治無し」と、唯一の救濟法を佛道に認めており、「自覺」其二にも「浮圖の教え」に「解脱」を求めている。「自覺」其一では「老いを畏るれば老いは轉た迫り、病を憂へば病は彌いよ縛る。畏れず復た憂へず、是れ老病を除く藥」と心の持し方を自らに提示し、老いから一時的にせよ逃れようとしている。このように何らかの方法によって、切實な存在となった老いを克服しようと、あるいはそれから逃避しようと努めていたのが四十歳の白居易であった。

三　五十代の白居易

白居易は、元和九年（八一四）四十三の歳が終わる頃に太子左贊善大夫となって、下邽での退居を脱してようやく再出仕した。ところが翌年六月に起こった宰相の武元衡暗殺事件に關連して江州司馬に貶謫された。江州での窮境意識は衰老感によっても増幅したが、白居易は「分を知って」心に「自足」を覺え、天命に「委順」して身體を常に「安らかに」保ち（卷七・〇三二八「詠懷」詩）、左遷の時期を乗り切った（二〇〇七年三月、中國藝文研究會出版、拙著『唐代の詩人と文獻研究』第二部第二章「江州・忠州時代と『閑適詩』の制作」參照）。元和十三年（八一八）末、忠州刺史に轉じ、元和十五年（八二〇）四十九歳になって中央に召還された。翌長慶元年には「文士の極任」と呼ばれる中書舍人にまで昇進したものの、「晩遇」の悲哀をかみしめた（同第三章「知制誥・中書舍人から杭州刺史への轉出」參照）。

ついで長慶二年（八二二）に白居易は杭州刺史に出されたが、そこでの生活を樂しむことで増大する衰老の憂いを解消させていった。拙論「杭州刺史時代」（前掲書第二部第四章）に、五十二歳の「二月五日花下作」詩（卷二〇・一三五八）を通してこのことを些か論じた。そこに指摘したように、當時はまだ老いから逃れようという心情が強かったと思われる。ところが、蘇州刺史などを經て、大和三年（八二九）五十八歳の三月に太子賓客分司となり、これより洛陽で半ば退休の生活、「中隱」（卷五一・二二七七）が送れるようになってからは、老いの苦しみに囚われるよりも、境遇に滿足する幸福感が白居易を包むことが多かった。例えば「偶作二首」其一（卷五一・二二八三）に、

伊余信多幸　拖紫垂白髮　　伊余（これ）　信に多幸　　紫（三品官の紫の印綬）を拖（た）らし白髮を垂る
身爲三品官　年已五十八　　身は三品官（太子賓客分司は正三品）爲りて　年は已に五十八

筋骸雖早衰　尚未苦羸掇　筋骸　早に衰ふと雖も　尚ほ未だ羸掇を苦しまず
資産雖不豊　亦不甚貧竭　資産　豊かならずと雖も　亦た甚だしくは貧竭せず
登山力猶在　遇酒興時發　山に登るに力は猶ほ在り　酒に遇へば興は時に發す
無事日月長　不羈天地闊　事無くして日月長く　羈(つな)がれずして天地闊し
安身有處所　適意無時節　身を安んずるに處所有り　意に適ふに時節無し
解帶松下風　抱琴池上月　帶を解く松下の風　琴を抱く池上の月

と、高位の官職、経済的に保障された生活、琴詩酒また登山を樂しむのに充分な氣力と體力がなおも備わり、「適意」の日々を過ごしてゆく。その悠々自適の喜びに溢れた生活空間が洛陽履道里の邸宅であり、「池上篇」（巻六〇・二九二八）に「優なるかな游なるかな、吾將に老いを其の間に終へんとす」という。

四　六十代の前半

大和五年（八三一）に白居易は六十歳を迎えた。四十七歳のころ「白雲期」（巻七・〇三〇五）に、「六十　身は太だ老にして、四體　支持せざらん」と思いやった。ところが今その年齢になってみると、「五十六十　却て悪しからず、恬淡清淨　心安然たり。……未だ筋力無きにあらずして山水を尋ね、尚ほ心情有りて管絃を聽く」と身心の健康が保持でき、「耳順」の老年を嫌悪するどころか、むしろ好ましく感じている（巻五一・二二四二「耳順吟。寄敦詩（崔羣）夢得（劉禹錫）」詩）。かつて中年の頃には、老いは克服すべき存在であった。老いから逃避しようともした。それは、老いの先に嚴然として待つ死への恐れからであった。また白居易の中年は、下邽退居・江州左遷という不遇の時代であり、窮境意識によって老いの愁いが先鋭になりがちであった。窮境意識はすでに消え去り、洛陽

での「中隠」の生活を喜び、健康にも恵まれた白居易は、老いを愁えず、あらがうことなく、あるがままに受け入れて生きるようになった。六十一歳の時、その心情を次の「任老」詩（巻五七・二七九一）に示している。

任老　　老いに任す

不愁陌上春光盡　　陌上　春光の盡くるを愁へず
亦任庭前日影斜　　亦た庭前の日影の斜めなるに任す
面黒眼昏頭雪白　　面黒く眼昏し頭は雪のごとく白し
老應無可更增加　　老いては應に更に增加すべきこと無かるべし

また太和九年（八三五）六十四歳の「覽鏡喜老」（巻六三・三〇〇八）では、

生若不足戀　老亦何足悲　　生若（も）し戀ふるに足らざれば　老いも亦た何ぞ悲しむに足らん
生若苟可戀　老卽生多時　　生若し苟くも戀ふ可くんば　老いは卽ち生くることの多時なり
不老卽須夭　不夭卽須衰　　老いざれば卽ち須らく夭すべし　夭せざれば卽ち須らく衰ふべし
晩衰勝早夭　此理决不疑　　晩衰は早夭に勝る　此の理は决して疑はず

という理を説き、老いは長い日月を生き抜いてこそ得られた結果であり、「當に喜ぶべくして當に歎くべからざる」（「覽鏡喜老」）ものであるという確固たる信念に到達した。死の前年、會昌五年（八四五）七十四歳に至ってもこの心を持ち續け、「歡喜二偈」其一（巻七一・三六四一）に「老いを得て年を加ふること誠に喜ぶべし」と詠っている。

ただし、六十歳を過ぎた白居易に悲歎がなかったわけではない。むしろ身邊には傷ましい不幸が續いた。大和五年（八三一）六十歳の時、一子の崔兒を三歳で亡くし、後嗣の望みを絶たれた。「哭崔兒」（巻五八・二八八〇）に「悲腸自ら斷つは劒に因るに非ず、啼眼昏を加ふるは是れ塵ならず」と悲痛の情を露わにしている。さらに親友の

元稹が七月に死去した。翌年には崔羣も亡くなった。二人の死を「何ぞ堪へん老涙交ごも流るるの日、多く是れ秋風搖落の時」と悼み、老友の劉禹錫に詩を寄せた（巻五六・二七〇〇「寄劉蘇州」）。また、澤崎久和「白居易の詩における『自問』について」（一九九〇年七月「福井大學教養學部紀要」第三八號）には、「自問」の語を用いた六十二歳以降の詩には「思友」「衰老」「感舊」の情を表わす「身世を問い慨嘆する作が目につく」と指摘されている。白居易は、これまでにも身世の慨歎をしばしば詩に示していた。しかし憂悲の情にいつまでも囚われず、愉悅の方向に心を向かわしめて安らぎを得るという人生觀を維持し、生涯を送ってきた。「老いに任す」「老いを喜ぶ」もこうした人生觀の上にたつ境地であったといえよう。ただ見過ごしてはならないのは、「老いを喜ぶ」底邊には深い悲哀が層を成していたということである。この悲哀の層は、白居易も生き續ける限り、また一つまた一つと重なるものであった。

五　晩年の白居易

白居易は、會昌六年（八四六）に七十五歳の生涯を終えるが、今それ以前の十年間を晩年とみなしてその平生を窺ってみたい。まず、身體の老衰が進んだことは、引き續いて頭髪に材をとって多く詠われているが、齒の抜け落ちたことからも老いを身に沁みて感じている。「齒落辭」（巻六一・二九五二）の序に「開成二年（八三七）、予春秋六十六。瘠黑衰白、老狀具はれり。而して雙齒又た墮つ。慨然として感歎すること之を久しうす。因りて齒落辭を爲り、以て自ら廣む」とそれを示している。末尾の「自ら廣む」とは、みずから心を慰めて悲歎をほぐすという意味である。本辭に、身體は「天地の委形」であるという「道經（『莊子』知北遊篇）」の教え、また「身は浮雲の如く、須臾にして變滅す」という「佛說（『維摩經』方便品）」を據り所にし、「宜しく百骸を委ねて萬化に順ふべき所なり。

胡爲れぞ一牙一齒の間に嗟嗟たらん」、と衰老は悲歎すべきものではないと確認している。この辭にも、憂悲に沈まず心の安定を保とうとする白居易が幾たびも繰り返した思考法が示されている。また「齒落辭を爲り、以て自ら廣む」というように、作品化によって慨歎を解消に導く營みも白居易の詩文に多く見られる特色である。白居易の場合、內面を見つめ直し、自らの心のあるべき方向を確認しつつたどる過程と、言葉を紡ぎだして作品化する營爲が同時に行われている。そして詩文成れば、悲歎の情は解消して心の安ぎが保たれるのである。

かねてより「蒲柳　質朽ち易し」（卷六・〇二二九）と自覺した白居易は、生涯、病氣との緣が切れなかった。開成四年（八三九）六十八歲の冬に見舞われた「風疾」[6]は、その最も大きなもので、死をも覺悟するほどであった。この大患について、あるいは病後に死を直視しつつ晚年を生きた白居易の死生觀、深まりを見せた佛敎信仰に關しては、拙論「白居易の墓誌自撰」（前揭拙著第二部第六章）を參考されんことを願うとして、ここには、病氣は却って安閑を得る好機と見なす「病中五絕」其二（卷六八・三四一二）の「正に時に安閑　好病の時」という句、また先に死去した親友に比べれば、老いての病氣は「多幸」だという其三（三四一三）の「多幸なり樂天　今始めて病む」の句を擧げ、樂天的な心の持ち方を病中においても失わず、苦難を乘り越えてゆく白居易の強靭な精神力を強調しておくに止めたい。

六十歲でなおも身心健康であったことは先に言及したが、白居易はそのために樣々な養生法を行っている。白居易の養生法實踐については、三浦國雄「白樂天における養生」（一九九四年一月、平凡社『中華文人の生活』）に詳論されている。また大平桂一「日日と四季の健康法」（同書）には、かつては健康への強い執着から養生法に心碎いたけれども、「風疾」以後、「白居易の日常生活には坐禪や養生法が自然にとり入れられてゆく。健康の完全な回復とか長壽とかを意識してあがくようなことはなく、生活の一部となってゆく」と述べ、晚年の白居易に論及されてい

る。大平氏は、その例に會昌二年（八四二）七十一歳の「晩起閑行」詩（巻六九・三五四一）を擧げ、詩中にいう齒周炎防止などに效果のある「叩齒」の法に觸れている。なお、この詩には「坐禪」も詠われているが、題にも示されている「閑行」も養生法の一つである。白居易が歩くことを好み、それが養生法になったことは三浦論文に指摘されているので、これも贅言は避けたい。ちなみに七十一歳の「夢上山」（巻六九・三五三九）詩によれば、足が病んでいない若い頃のように山谷を跋渉した夢が詠われ、「晝行は蹇澁すと雖も、夜歩は頗る安逸」とあるので、さすがにこの時分には健歩困難であったらしい。

洛陽の南、伊水の龍門に舟人を苦しめる「八節灘」「九峭石」という難所があった。白居易は、一僧侶と發心して開鑿工事を行い、これを除いた。竣工して詠じた「開龍門八節石灘詩二首幷序」其二（巻七一・三六二六）に「七十三翁　旦暮の身」というごとく、死の二年前、會昌四年（八四四）のことであった。序に「茲れ吾が用ふる所、願ひに適ひ心を快くし、苦を拔き樂を施す者のみ。豈に獨り功德福報を以て意と爲さんや」とある。この事業は、佛の教えに從うという側面が強く、翌年の「歡喜二偈」其一（巻七一・三六四一）にも「心中　別に歡喜の事有り、龍門の八節灘を開き得たり」と詠われている。ただし、人々の「苦を拔き樂を施す」ことは、少壯の頃から抱いていた「兼濟の志」に通ずるものであり、その最晩年の實踐と理解することも充分可能であろう。あるいは現代からすれば、社會奉仕に匹敵する行爲といえる。社會への寄與は老いの生き甲斐になったに違いない。

白居易の洛陽での退居生活が琴（音樂）・詩・酒の喜びに滿ちていたことは、開成三年（八三八）六十七歳の「醉吟先生傳」（巻六一・二九五三）によく語られている。その一節には「性酒を嗜み琴に耽り詩に淫す。……既にして醉ひ復た醒め、醒めて復た吟ず。吟じて復た飲み、飲みて復た醉ふ。醉吟相仍り、循環するが若く然り」とあり、また「今の前吾適へり。今の後、吾自ら其の興の何如なるかを知らず」と結び、三者を通して將來ますます喜びに

滿ちた人生が享受できるという確信にも近い思いを表わした。ただし翌年の「風疾」のため琴は、自らの演奏が困難になっている（巻六九・三五二五「病中宴坐」に「手痺れ琴を援くを休む」とある）。詩の吟詠は、「病中詩」に明らかなごとく、全く「風疾」の影響を受けず、亡くなる會昌六年（八四六）までも止むことがなかった。また、作るに隨い數を増す詩稿をまとめたり、舊作に手を加えたりする作品集の自編にも熱心であった。六十歳以降の編纂の過程を見ると、下記のごとくである。

①太和九年（八三五）六十四歳　新作を『後集』十卷にまとめ、舊編『白氏長慶集』五十卷と併わせ『白氏文集』六十卷として江州東林寺に奉納。

②開成元年（八三六）六十五歳　『後集』十五卷を編し『白氏文集』六十五卷として洛陽聖善寺に奉納。

③開成四年（八三九）六十八歳　『後集』十七卷を編し『白氏文集』六十七卷として蘇州南禪院に奉納。

④開成五年（八四〇）六十九歳　『白氏洛中集』十卷を編して洛陽の龍門香山寺に奉納。

⑤會昌二年（八四二）七十一歳　『後集』二十卷を編し『白氏文集』七十卷を完成。

⑥會昌五年（八四五）七十四歳　『續後集』五卷を編し『白氏文集』七十五卷の「大集」を完成し、姪龜郎（弟白行簡の遺子）と外孫玉童（娘阿羅と婿談弘譽との子）に與える（ただし『續後集』五卷は後に散佚し、現『白氏文集』七十一卷本では最末の一卷に再編されている）。

このように晩年の頻繁な編集が近づく死期を意識してのゆえであったことは想像に難くない。また、七年で十卷を増した『後集』、最晩年の三年で五卷にもなった『續後集』の分量から、創作意欲の旺盛さが些かも衰えていないことが分かる。詩作は情感の表出であって、白居易がそれを持續したのは、みずみずしい心情を失わず老年を送ったという證である。白居易にとって、日々の吟詠と後世に作品を留めようとする編集作業も、老いを生きる大き

な支えになっていたといえよう。なお、飲酒の喜びも死去の年に及んでおり、「美醞徐徐に一巵を進む」（巻七十一・三六五五「自問此心呈諸老伴」）といい、酒杯を離すことがなかった。

おわりに

白居易の最後の一年、會昌六年（七四五）の作と確定される詩は、次の「自詠老身示諸家屬」（巻七一・三六五四）を含め六首のこされている。

自詠老身示諸家屬　　自ら老身を詠じ諸（これ）を家屬に示す

壽及七十五　俸霑五十千　　壽は及ぶ七十五　俸は霑ふ五十千
夫妻皆老日　甥姪聚居年　　夫妻　皆老の日　甥姪　聚居の年
粥美嘗新米　袍溫換故緜　　粥は美く新米を嘗め　袍は溫く故緜を換ふ
家居雖濩落　眷屬幸團圓　　家居　濩落たりと雖も　眷屬　幸ひに團圓たり
置榻素屏下　移爐青帳前　　榻を素屏の下に置き　爐を青帳の前に移す
書聽孫子讀　湯看侍兒煎　　書は孫子の讀むを聽き　湯は侍兒の煎るを看る
走筆還詩債　抽衣當藥錢　　筆を走らせ詩債を還し　衣を抽き藥錢に當つ
支分閑事了　把背向陽眠　　閑事を支分し了（を）はり　背を把って陽に向って眠る

ここには「家屬」との團欒を喜び、平安な生活を送る白居易の幸福な老後の日常が描かれている。長壽のめでたさ、ここにありとでも評すべき光景である。これより先、會昌二年（八四二）、長い官人生活を終えて致仕した際に、よくぞここまでやって來られたものだという達成感を「達哉樂天行」（巻六九・三五四七）に高らかに詠い、七十一

歳の人生に滿足した。それより四年、退老後の生活を樂しんだことは既述の通りである。

ところが會昌六年のまたの作「詠身」（巻七一・三六五八）に我が身を顧みて、「餘年自ら問ふ　將た何の用かあると。恐らくは是れ人間賸長の身」と詠じ、自分は世間の無用者なのだろうと自己の存在を否定的に捉えている。「餘年」は、首二句に「風に中りてより來（このかた）　三たび閏を歴（へ）て、車を懸けてより後　幾たびか春に逢ふ」というので、「風疾」から生き殘った七年と致仕後の四年を指す。白居易は、かろうじて死を免れ、また官界から離れても、なお歳月を送ることに果たして生きる意義があるのかと懐疑的になったのである。また會昌元年（八四一）から五年（八四五）の間の作とされる「能無愧」詩（巻七一・三六五二）には、身の回りの世話を受けることを申し譯なく思い、「左右を廻看して能く愧づること無からんや。枯殘廢退の身を養活して」と慙愧の念を表わしている。あるいは、これらは單なる老いの愚癡であって、それほど深刻に理解すべき心情ではないのかも知れない。しかし、白居易が愉悅に浸りきって、殘餘の日月を氣樂に過ごしてばかりいたのではないことは確かである。さらに下定雅弘「宰相になれなかった白居易」（一九九五年四月「中國文化論叢」第四號。一九九六年一〇月、勉誠社『白氏文集を讀む』再錄）の指摘のごとく、會昌六年の「予與山南王僕射・淮南李僕射、事五朝踰三紀。海内年輩、今唯三人。榮路雖殊、交情不替。聊題長句、寄擧之・公垂二相公」詩（巻七一・三六五九）には、宰相職に就くことがなかったことを殘念に思う白居易の氣持ちが明確に現われている。

白居易は、人生を喜ぶべきものとして捉え、愉悅と自適の境涯を詠うことを大きな特色とする詩人である。肉親・知友の死に度たび遭遇しても、悲しみから心を取り戻している。死を覺悟した大患をも好機と捉えた。歩行困難となっても、夢で自由に歩けることを樂しげに詠う。左遷の苦難も舐めた官人世活を終えて自分を「達せるかな」と褒め、「家屬」に圍まれての平安な老後の生活に滿足しきった。こうした愉適を繰り返し詩に詠い、そうす

ることで明朗な心を保って生涯を終えた。白居易は、老いを生きるには、心に喜びを見出し、それを失わないことが重要であると我々に教えているように思われる。だが、その最晩年の彼においてさえ、なお時に生きる意義を自問し、あるいは人生への後悔の念がよぎることもあったのである。白居易の生涯を老いという點から概觀し、ここに至って「人生實に難し」という『左傳』（成公二年）の言葉が思い浮かび、肅然たる氣持ちになった。

註

（1）白居易の文學と老いに論及する日本の先行研究として、いま二、三を擧げるならば、澤崎久和「白居易の寫眞詩をめぐって」（一九九一年二月「福井大學教育學部紀要　人文科學」第三九號）、鹽見邦彥「白居易『紀年』詩考」（一九九四年三月、東方書店『中國的人生觀・世界觀』）、丹羽博之「白樂天七十歳（其一）」（二〇〇〇年七月、大手前大學『人文科學の諸相』）がある。

（2）『白氏六帖』については、花房英樹「白氏六帖に就いて」（一九四九年七月「漢文學紀要」三號）、山崎誠「白氏六帖考」（一九九三年七月、勉誠社『白居易研究講座』第二卷）に詳しい。

（3）なお唐代の均田制における人民負擔の規定では、隋制を繼承して六十歳を「老」とし、それ以上の者には賦役を免じたが（『大唐六典』卷三尚書戶部など）、それが五十八歳に改められ、さらに廣德元年（七六三）には五十六歳に引き下げられた（『唐會要』卷八十五團貌など）。

（4）白居易の作品は那波本によって卷次を示し、作品番號・繫年は花房英樹『白氏文集の批判的研究』（一九七四年七月、朋友書店修訂再版本）に依據した。

（5）田口暢穗「白居易の『嗟髮落』詩をめぐって」（一九八二年三月「鶴見大學紀要」第一九號）は、禿頭を題材にした白詩を主として取り上げ、歎老の情や老いを達觀するゆとりの精神について論じている。

（6）「風疾」については、下定雅弘『白樂天の愉悅』（二〇〇六年四月、勉誠出版）頁三二八、また小高修司「白居易『風

痺』改」（二〇〇六年一〇月「白居易研究年報」第七號）に詳しい。

【附記】 本稿は、二〇〇五年一二月八日の大谷大學中國文學會主催「中國文學公開講演會」において、「『老』を生きる白居易」と題して行った講演の内容を基にまとめたものである。

（立命館大學文學部教授）